



結核しずおか

59号 2026年9月24日

発行・編集

公益財団法人 静岡県結核予防会
〒420-0915
静岡市葵区南瀬名町 6-20
TEL 054-261-2512
FAX 054-261-9474
Eメール tb-shizuoka@gaea.ocn.ne.jp
HP www.jata-shizuoka.org



巻頭言

平素より静岡県の皆様には公益財団法人静岡県結核予防会の活動にご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。当予防会の事業は市町村自治体職員の皆様、各事業所、団体保健担当者の方々のご協力と、静岡県医師会、県内基幹病院等地域の先生方のお力添え無くしては日々の業務も成り立ちません。皆様方の日頃のご理解とご協力により静岡県の結核罹患率、結核集団発生数ともに全国平均を下回っており、地域保健所、行政関係機関の積年の努力の結果と思料される次第であります。2021年には全国、静岡県、静岡市とともに WHO の定める低蔓延国の基準を達成したところでしたが、2023、2024年度では減少傾向の鈍化がみられ、2025年の静岡市では前年の集団感染による感染者増加を割り引いてもなお微増とみられます（R7年度静岡市コホート検討会）。2023、2024両年度の人口10万対罹患率は共に8.1で低蔓延国の水準（罹患率10.0以下）ですが、主要7か国（G7）の平均罹患率は5.7でした（2022）。WHO では2015年に「Zero TB 2030」を呼びかけ、2030年迄に結核による死亡、疾病による苦難をゼロにするという目標を掲げていますが、結核検診の受診率は全世界的に80%に留まり全ての感染者を網羅出来てません。2024年の新規結核患者数830万（推定発症者数の78%）、死亡者数123万、上位8か国で世界全体の67%の罹患者を占めています。公益財団法人結核予防会ではアジア太平洋地域、アフリカ諸国の結核予防、検診事業を現地へスタッフの職員を派遣して進めており、WHO の勧める感染症克服戦略に貢献しています。1990年代以降長期滞在ビザ取得緩和政策の結果、高蔓延国からの定住者が増えてきた結果ですが、国内結核登録患者のうち外国出生者の増加がみられ、2024年は全結核登録患者数の19.7%を占めるようになっていました。2025年3月より高蔓延国からの入国前結核スクリーニングが始まりました。発病前の感染の有無について検診を本国で実施することにより入国後の発病を防止する狙いがあり、低蔓延国としてのわが国の結核対策の重要な対策の柱となっています。

我が国における結核死亡率は1918年（大正7）にピークを記録した後、上水道普及や栄養水準向上、1951年以降 BCG 経皮接種、衛生知識の向上した結果、大戦前後の一時に急増するも、1951年の結核予防法施行後、ほぼ直線的に年間10%程度の減少を続けてきましたが、1977年以降罹患率減少の鈍化が見られるようになりました。1970年代を通して年間9.0%程度の減少でしたが、1980年代に入ると7%から2%へ減少率の鈍化がみられ、1990年代に入ると更に鈍化傾向を示し、1997年は前年より微増、1999年は1994年頃の水準に戻るといった結果となっていました。かかる事態を厚生省は重く見て「結核緊急事態宣言」を発出して全ての医療機関に結核対策を促した経緯があります。2000年以降は再び順調な減少傾向となり、新型コロナウイルス（COVID-19）発生前の2019年には1999年の33%という罹患率減少を記録して2021年に低蔓延国入りを果たした訳ですが、新型コロナウイルス感染流行時期にマスク・手洗い励行・換気・隔離等の対策が国民的に浸透した結果、インフルエンザ感染の流行も見られないという云わば国民的防疫体制下に結核感染も押さえこんだという印象も拭えません。2023年5月7日以降、全数報告から定点機関報告に移行して後、新型コロナウイルス罹患率はインフルエンザウイルス感染症とほぼ同等の水準となっています。

駆け足で結核感染症対策の推移をみてきましたが、ヒト型結核菌感染症罹患者が減る一方で、同じ抗酸菌に属する非結核性抗酸菌症罹患者の報告が増えており、一般雑誌にも啓蒙、認知を呼びかける記事を見かけるようになっていました。環境常在菌であることから従来の結核対策とは異なる対策が求められています。次回にその詳細を報告することとします。



公益財団法人静岡県結核予防会 診療所所長 大滝 光生



2025年度の「結核・呼吸器感染症 予防週間キャンペーン」に参加して

静岡県立大学 看護学部 国際看護学 教授 竹熊カツマタ 麻子

静岡県立大学看護学部では、2025年度より、4年生の発展看護実習において国際看護学を選択した学生が、静岡県結核予防会・静岡県結核予防婦人会の皆様とともに「結核・呼吸器感染症予防週間キャンペーン」に参加しています。

国際看護の実習で、なぜ地域の結核予防活動に参加するのでしょうか。その理由の一つは、結核が決して「過去の感染症」ではないことを、学生たちに知ってほしいからです。

日本では、結核はかつて「国民病」と呼ばれ、多くの人々の生命を奪いました。その後、医療や公衆衛生の発展、生活環境の改善などによって患者数は大きく減少しました。しかし世界に目を向けると、結核は今なお世界三大感染症の一つとされる重要な健康課題です。人々が国境を越えて行き来する今日、世界で起きている感染症の問題と、私たちが暮らす地域の健康は切り離して考えることができません。学生には、世界の健康課題を遠い国の出来事として学ぶのではなく、「静岡で結核を予防する」という身近な活動を通して、地域と世界がつながっていることを実感してほしいと考えています。それが、私たちが国際看護の学びの中に結核予防会・結核予防婦人会の皆様との協働を取り入れている大きな理由です。



そして、この活動にはもう一つ大切な学びがあります。それは、「人に伝えることの難しさ」を自分自身で経験することです。駅前や繁華街で健康や疾病予防の啓発活動が行われている光景を目にすることがあります。しかし、忙しい日常の中で、私たちはその前を通り過ぎたり、差し出された資料を受け取らなかったりすることも少なくありません。ところが、自分が「伝える側」になると景色が変わります。勇気を出して声をかけても立ち止まっていただけない。関心を持っていただくこと自体が難しい。正しい情報を持っているだけでは、人には届かないのです。

看護も同じです。健康の大切さを一方的に説明するだけでは、人の行動を変えることはできません。相手の生活や関心に目を向け、どのような言葉なら届くのかを考える必要があります。街頭での啓発活動は、そのことを肌で感じる貴重な機会になっています。

さらに学生たちは、結核予防婦人会の皆様が長年にわたり地域に根ざして予防活動を続けてこられた姿から、地域の健康を守る活動は一朝一夕につくられるものではないことも学びます。

地域で学び、世界を見る。そして、長年培われてきた予防活動の経験を次の世代へつないでいく。このキャンペーンへの参加が、学生たちにとって国際看護と地域保健の双方を考える大切な学びとなることを願っています。





—令和8年度公益財団法人静岡県結核予防会 講演会—

県民健康づくり講座

WEB配信

主 催／公益財団法人静岡県結核予防会・静岡県結核予防婦人会

参加無料

講演期間 2026年9月24日(木)～10月13日(火)

「感染症危機における リスクコミュニケーション」

講 師

株式会社グローバルヘルスコミュニケーションズ
代表取締役
兼 京都大学大学院医学研究科非常勤講師

蝦名 玲子 先生



感染症危機において、正確な情報発信と社会との信頼形成は不可欠です。
本講演会では、専門家がリスクコミュニケーションの基本と、現場で役立つ実践
ポイントを解説します。皆さまのご参加をお待ちしております。

お申込みから受講までの流れ



講演期間内は
いつでもお申込みいただけます。

【①申込みフォーム②メール③FAX】いずれかの方法でお申込みください

お
申
込
み
方
法

①申込み
フォーム



②メール



③FAX申込

別紙
専用申込書
をご利用
ください

申込み後
事務局より
登録完了
メール送信

配信日2日前より

視聴に関する
URL・資料などを
送付いたします

①申込みフォームURL

[https://
forms.gle/6aoHvupYFo1SCWhL9](https://forms.gle/6aoHvupYFo1SCWhL9)

②申込みEメール

tbshizu@gmail.com

【記入事項】

①Eメールアドレス ②氏名/団体名 ③電話番号 ④参加人数

お問い合わせ: TEL054-261-2512 (担当/杉山・近藤)



実はまだ「過去の病気」ではありません！ 知っておきたい結核の最新情報

「結核」と聞くと、「昔流行った病気」というイメージをお持ちの方も多いかもしれません。しかし、日本国内では今も年間約1万人の新しい患者が報告されており、決して他人事ではない病気です。今回は、日本の結核の「今」と、予防のために気をつけたいポイントをお伝えします。

いま注意すべき「2つの特徴」

① 患者の6割以上が「65歳以上の高齢者」

若い頃に感染して体内に潜んでいた結核菌が、加齢による免疫力の低下に伴って再び活動を始める（発症する）ケースが多く見られます。特に80歳以上の割合が高くなっています。

② 若い世代は「外国生まれの方」が増加

20代の新規患者においては、海外（結核が多く流行している国）から入国された方が大半を占めるという特徴もあります。

！ 早めの対処が大切！チェックしたい初期症状

結核の初期症状は**風邪によく似ています**。「ただの風邪かな？」と放置してしまうと、知らず知らずのうちに家族や職場・地域の方へ感染を広げてしまうリスクがあります。

【こんな症状はありませんか？】

・2週間以上続く咳（せき） やたん ・微熱や体が重い感じ（倦怠感） ・原因のわからない体重減少や寝汗

➡ 2週間以上「咳やたん」が続く場合は、早めに医療機関（呼吸器内科など）を受診しましょう。

私たちができる予防策

・年に1回は「胸部 X 線（レントゲン）健診」を受けましょう

早期発見できれば、薬の服用でしっかり治すことができます。

・免疫力を高める生活習慣

十分な睡眠、バランスの良い食事、適度な運動を心がけましょう。



複十字シール募金にご協力お願いします

★★ 複十字シール運動 8月1日～12月31日 ★★

結核予防会では、結核を中心とした胸の病気をなくして、健康で明るい社会をつくるため、今年度も8月1日から12月31日まで「複十字シール運動」を実施、募金活動を行います。

皆様からお預かりした募金は、病気への理解を広め、予防の大切さを伝えるための普及啓発活動や調査研究活動などの大きな支えとなっております。

今年度も引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

総務課 大澤

複十字シール運動から、結核ゼロの世界へ！

たすけあインコ



「複十字シール運動」は、結核のない世界をつくることを目的に1952年に始まりました。結核予防会及び全国の協力団体が窓口となり、募金活動を行うとともに、病気への理解を広め、予防の大切さを伝えています。

皆様からいただいた募金は、主に結核の国際協力、結核や肺がん・COPD（慢性閉塞性肺疾患）などの普及啓発や結核予防団体の支援、調査研究等に役立てられており、日本と世界の人々の健康を守ることに繋がっています。

シールハイハイ



複十字シールには、健康を願うメッセージが込められています！



2026年度の複十字シールのテーマです。日本のスポーツは歴史や文化と関係しています。子供の頃は、遊びや体育の授業を通して様々なスポーツを経験し、相手を尊重し合うフェアな考えを学びました。世代を超えても、体を動かすことは人々の心の健康と喜びにつながっています。



結核で失われる命（年間）

日本 ▶ 約 **1,461人**

海外 ▶ 約 **123万人**

結核を発病する人（年間）

日本 ▶ 約 **10,051人**

海外 ▶ 約 **1,070万人**

2025年度募金報告



税の優遇措置

募金は、寄附金控除の対象となり、税制上の優遇措置を受けることができます。

表彰制度

年間個人50万円、法人100万円以上の募金をいただいた方に、結核予防会の規程により、結核予防会経費名の感謝状の贈呈がございます。

海外では

国内の活動で培った技術、知識、経験を活かして、世界の人々を結核から守るために**国際協力**に取り組んでいます。

- 医療従事者への技術指導
- 正しい知識の普及啓発
- 患者さんを支える住民ボランティアの育成



日本では

患者数が減少し、結核への関心が低下しているため、**普及啓発**に重点をおいています。

- 全国の協力団体を通じた啓発キャンペーンの実施
- 結核についてわかりやすく解説したパンフレット「結核の常識」など教育広報資料の作成、配布

